

# 人間灰

海野十三

青空文庫



赤沢博士の経営する空気工場は海拔一千三百メートルの高原にある右足湖畔うそくこはんに建っていた。この空気工場では、三年ほどの間に雇人やといにんがたぎたぎに六人も、奇怪なる失蹤しつそうをした。そして今に至るも、誰一人として帰って来なかつた。

ずいぶん永いことになるので、多分もう誰も生きていないだろうと云われているが、ここに一つの不思議な噂があつた。それは彼の雇人が失蹤する日には、必ず強い西風が吹くというのである、だから雇人たちは、西風を極度に恐れた。

丁度この話の始まる日も、晩秋の高原一帯に風速十メートル内外の大西風が吹き始めたから、雇人たちは、素破すわこそとばかり、恐怖の色を浮べた。夜になると、彼等は後始末もそこそこに、一団ずつになつて工場を飛び出した。彼等はこんな晩、工場内の宿舎に帰つて蒲団ふとんを被かぶつて寝る方が恐ろしかった。皆云いあわせたように、隣り村の居酒屋へ、夜明さかもりかしの酒宴さかもりにでかけていった。

後に残されたのは、工場主の赤沢博士と、青谷二郎あおやじろうという青年技師と、それから二人の門衛だけになった。その外に、構内別館——そこは赤沢博士の住居になっていた——に博士夫人たまえこ江子という、博士とは父娘おやこにしかみえぬ若作り婦人がたった一人閉じ籠っていた。青谷技師も午後八時にはいつものように、トラックを運転して帰っていった。赤沢博士の自室には、まだ永く灯りがついていた。しかし十時半になると、その灯りも消えて、本館の方は全く暗闇の中に沈んでしまった。門衛も小屋の中に引込ひきこんでしまい、あとは西風がわが者顔に、不気味な音をたてて硝子戸ガラスや柵を揺すぶっていた。湖畔の悪魔は、西風に乗って、また帰ってきたのであろうか。

その夜も余程更けた。

この空気工場から国道を西へ一キロメートルばかり行ったところに、例の庄内村しょうないむらと云うのがある。そこには村でたった一軒の駐在所が、国道に面して建てられてあった。宿直の若い警官は伝説の西風に吹かれながら怪失踪事件のことを考えていた。この事件は例の伝説と共に、県の検察当局へ報告されたのであるが、そのうち誰か適当な人物を派遣するという返事がきたきりで、あとは人も指令も来なかった。全く相手にされない形だった。これが直ぐ死骸が出てくるとか、血痕ちまが発見されるとかであれば、大騒ぎとなるのである。

うが、地味な失踪事件に終わっているために、犠牲者が六人出ても、何にも相手にされないのだと思うと、彼は庄内村の駐在所が大いに馬鹿にされていることに憤慨ふんがいせずにはいらなかった。今夜こそ、もし何かあつたら、それこそ彼は全身の勇を奮ふるつて、西風に乗ってくる妖魔ようまと闘うつもりだった。

丁度午後十一時半を打ったときに交番の前を、工夫体の一人の男がトコトコと来かかった。彼の男は、立番の巡查の姿を認めると足早やにスタスタと通りすぎようとした。

「コラ、待てッ——」

と巡查は叫んで、怪漢めがけて駆けだした。

長身の痩せ型の男は、巡查の大喝たいかつを聞くと、そのまま足を停めた。そして難なく腕を捕えられてしまった。

「お前は今ごろ何処へゆくのか。ちよつと交番まで一緒に来い」

男は素直に腕を取られたまま、駐在所の方へ引張られた。巡查は帽子の下から光る一癖ありげな怪漢の眼から視線を外はずさなかつた。しかし駐在所の灯の所まで引いてきたときには、腰を抜かさんばかりに駭おどろいた。

血！ 血！

怪漢の帽子といわず、襟えりをたてたレンコートの肩先といわず、それから怪漢の顔にまで夥おびただちのりしい血糊が飛んでいた。大した獲物だった。

「神妙にしろッ。この人殺し奴！」

腕力に秀でた巡査は、怪漢の手を逆にねじあげると、忽たちまち捕繩ほじょうをかけてしまった。

「乱暴をするな、なぜ縛るんだ」

と怪漢は眉をピリピリ動かして云った。

「白つぱくれるな。なぜ縛られるんだか、云うよりも見るが早いだろう」

そういった巡査は、壁の鏡を外すと、見えるようにその怪漢の前に差出した。怪漢はハツと顔色をかえて、唇を噛んだ。

大獲物だった。西風の夜のこの獲物は、鴨かもが葱ねぎを背負ってきたようなものだった。うつかり居睡いねむりでもしていようものなら、逃げられてしまう筈はずだった。そうすれば、今夜も亦また怪談だけで済んでしまうことだったろう。全く間一髪の出来事だった。遂に彼は血のついた怪しい男を捕えた。夜が明ければ、空気工場へ自転車で行ってみよう。きつとまた誰か、今夜のうちに失踪しているに違いない。それは一体誰だろうか？

かの巡査は、だんだん、昂奮してくる自分自身を感じながら、所轄のK町警察署へ、深

夜の非常電話のベルを鳴らした。

2

殺人鬼捕わる！

庄内村はひっくりかえるような騒ぎだった。中にも一番おどろ駭いたのは、所轄K町署員だった。血まみれの怪漢を庄内村の交番で捕えたという報があつたので、深夜をいと厭わず丘署長が先登せんとうになつて係官一行が駈けつけた。これを一応調べて、とりあえず臨時の調べ室を、ちようど丁度空いていた村立病院の伝染病棟へ設け（これはちよつと変な扱い方だった）怪漢をその方へ移す。そのうちに夜が明けてホツと一息ついたとき、そこへ電話が掛つて来て、ゆうべ西風の妖魔が、空気工場から若き珠江夫人を奪つていったという悲報を伝えた。これは大変だといふので、丘署長の一行は、徹夜をして血走つた眼を一層赤くしながら、自動車飛ばして問題の空気工場へ駆けつけねばならなかつた。それにしても七人目の犠牲

者は今までとはガラリと變つて、この空氣工場の女王、珠江夫人だとは実に意外な出来事だった。

丘署長は、リユーマチの氣味で痛い腰骨こしほねを押えながら、空氣工場の門をくぐった。それは何という不氣味な建物だったろう。本署の台帳によつてみると、この空氣工場の營業品目は、液体空氣、酸素ガス、ネオンガス外ほか數種、それに氣球ということであつたが、その一風變つた營業品はこんな奇怪なる建物から生れるのかと思うと、變な氣がした。

正面の本館というのを入れて、応接室に待っていると、そこへ二人の人物が入つてきた。「やあ、これはどうも……」

と、先に立つた頤髭あごひげのある土色の顔に部厚の近眼鏡をかけた小男が奇声でもつて挨拶をした。それは工場主である理学博士赤沢金弥あかざわきんやと名乗る人物だった。

「私が技師の青谷二郎です。——」

続いて後に立つていたのが、こんな風に名乗りをあげたが、これは工場主とはちがつて、すこし才子走さいしほしつているが、容姿端麗なる青年だった。

「一体どうしたのかネ」と署長は無遠慮な声を出した。

「こう再三失踪者を出すということについては、君の責任を問わにやならん」



そういわれた赤沢博士は、眼玉をギョロつかせて署長を睨み据えた。

「三年来の失踪者が判らんのでは、わし達も警察の存在を疑いたくなりますよ。早く家内を探し出して下さい」

青谷技師は、その後方で一人気をもんでいる様子だった。

署長は「では何もかも言うのですぞ」と一喝<sup>いっかつ</sup>して置いて、まず工場主から夫人失踪前後の模様を聴取した。

「わしは昨夜十時頃まで工場にいました」と博士は口だけを動かした。「わしは調べものがあつたから、本館二階の自室で読書をしていたのです。十時を打ったので灯を消し、本館を出て、別館へ帰りました。そこはわしと家内との住居<sup>すまい</sup>に充<sup>あ</sup>てているのです。ところが家内は私を出迎えません。わしは家内の部屋へ行ってみました。家内はそこにも見えません。いろいろ探しましたが影も形もありません。それからこつち、家内を一度も見掛けないのです。わしの知っているのは、それだけです」

「君は夫人がどうしていると思つていたのか」

と丘署長が尋ねた。

「はい、多分ベッドに寝ていることと思ひました。しかしベッドはキッチンとしていまして

別に入つた様子もありません」

「灯りは点いていたかネ」

「いいえ、点いていませんでした」

「お手伝いさんかなんかは居ないのかネ」

「一人いたのですが、前々日に親類に不幸があるというので、暇を取つて宿下りをしていました。だから当夜は家内一人きりの筈です」

「何という名かネ。もつと詳しく云いたまえ」

「峰花子といます。別に特徴もありませんが、この右足湖を東に渡つた湖口に親類があつて、その従姉が死んだということでした」

「君は夜中に夫人の失踪に気付きながら、なぜ人を呼ばなかつたのだ」

「わしは青谷技師以外の者を頼みにしていません。それでこれ呼びたかつたのですが、技師の家は湖水の南岸を一キロあまり、つまり湖口なのです。ですからたいへんです。昼間なら一台トラックがあるのですが、いつも技師が自宅まで乗つて帰るので、その便もありません。それで夜が明けて出勤してくるのを待つことにしたのです。第一、わしはもう十年以上も、この工場から一步も外へ出たことがありませんでナ」

丘署長はフーンと大きな息をして、赤沢博士の顔を見つめていたが、今度は青谷技師のほうへ向き直った。

「君は昨日、何時ごろ帰っていったのかネ」

「八時ごろです」

「トラックに乗ってかネ」

「そうです」

「どこかへ寄ったかネ」

「どこへも寄りません。家へ真直まっすぐに帰りました」

「夫人の失踪について心あたりは？」

「一向にありません」

署長はジツと青谷技師を見下ろしていたが、

「君は昨日からその靴を履いていたのかネ」といった。その靴には、生々しい赤土がついていた。この辺には珍らしい土だった。

「はあ……今朝工場の内外を探しに廻りましたので……」

丘署長はそれから二人に案内させて、工場内の主なる室を案内させた。大きな機械のあ

る仕事場も動力室も検<sup>しら</sup>べた。倉庫や事務室もみた。一番よく検べたものは、赤沢博士の自室と、青谷技師の私室と、それから特別研究室の札の懸っている稍<sup>やや</sup>複雑した部屋だった。特別研究室は博士と技師との二人だけが入ることを許されてあつたもので、ここで大事な研究がなされた。いろいろと特別の戸棚や、機械や、台などが並んでいたが、別に血痕も見当らなかつた。結局、この工場の中には異変が認められなかつたので、今度は別館の住<sup>す</sup>居<sup>まい</sup>へ行つて検べた。この方も博士の言葉を信ずるのに参考になつたばかりで、夫人の遺書一つ発見されなかつたのである。

「どうも相変らず工場の方は苦が手だ」と署長は痛む腰骨を叩きながら云つた。これは歸つて、昨夜捕えた血まみれ男を調べる方が捷<sup>はや</sup>徑<sup>みち</sup>に違いない。

一行は自動車で引揚げていった。

## 「村尾某の陳述——」

と冒頭して鉛筆で乱雑に書きならべてある警察手帖をソツと開きながら、署長席の廻転椅子にお尻を埋めた丘署長はブツブツ独り言を云つていた。

「村尾六蔵、三十歳か、なるほど……中々面白い名前をつけたものだ。さてその日の足取りは……まず第一が……」

こんな風に、ゆつくり読みかえしてゆく丘署長の遅いスピードにはとてもついてゆけないから次にその要点を述べる。血まみれの怪漢のこの足取り陳述の中には、この事件を解く重大な鍵が秘められてあつたことは、後に至つて思い合わされたことだった。

(一) 村尾某は ひがしおかむら 東丘村 (東西に長く横よこたわる右足湖の東の地を云う。湖口は東丘村が湖に臨のぞむところを云う) から、右足湖を越えて、庄内村 (右足湖の西の地を云う、空気工場はその湖水に臨うみじりむ湖尻うみじりにある) へ入ろうとしたが途中、東丘村で日が暮れ、湖水にはまだ遠かつたこと。

(二) 午後七時半ごろ、かなり湖水近くまで来たと思つたときに、一つの墓地に迷いこんだ。そこには、真新しい寒かん冷れい紗いしやづくりの竜りゆう幡はんが二流りゆうハタハタと揺うごめいている新にい 仏ぼつの墓ぼが懐中電灯の灯りに照し出された。墓ぼ標ひょうには女の名前が書いてあつたが覚えて

いない。しかし墓は土をかけたばかりで、土饅頭の形はまだ出来ていなかったこと。

(三) 墓の側にはトラックの跡がついていたので、それについて行けば本道に出るだろうと思つて辿つてゆくと、やがて一軒の家の前に出た。標札には「湖口百番地、青谷二郎」と認めてあつた。その家の前に湖水の水が騒いでいたこと。

(四) 湖水を渡るつもりで舟を探したところ小さいのが一艘あつたので、これに乗つて西へ西へと漕ぎ出した。西風はだんだん強くなつて、船は中々進まない。半分ぐらい来たところで、真正面に空気工場の灯が見えた。元気を盛りかえして漕いでゆくうちに、風が急に変わったものと見え舟が北岸に吹き寄せられた。そのとき、ちよつと気がついたのは、たいへん冷たい雨が顔に振りかかったことだが、大汗かいているときなので気持ちが悪かつた。この雨はまもなく熄んだ。それからは岸とすれすれに湖尻まで漕ぎつけたこと。

(五) 湖尻に上つたのが十時半ごろだった。空気工場の横を通つたがなんだか辺に白いものが見えるので、懐中電灯で照らしてみると、構内に気球が三個、巨体を地上の杭に結びつけられて、風にゆらゆら動いていたこと、工場の中窓には灯がついていないようだった。(六) それから工場を後にし、大西ヶ原を横断して、庄内村の家つづきまで来たところで、駐在所の巡査に捕えられたこと。

「……なるほど、こいつは面白い」

と署長は一人で悦えつに入いっていた。

「なにが面白いものか」

と署長の頭の上で、頓とんきよう狂きやうな声こゑがした。駭おどろいて署長がうしろを向くと、そこには彼と犬けんえん猿えんの間にあるK新報社長の田熊たぐま氏が嘲笑あざわらっていた。彼は署長の手帖の中身をスツカリ藁わらばんし半紙はんしに書き写かしてしまつてから、激げきしい地声じこゑでまくし立てた。

「手帖てつを展ひらげるなら、こんなくだらんことを見せるのは止して、犯人の名を書いてあるところでも見せた方がいいよ」

「オイ貴様あなた、盗ぬすびと人ひとみたいなやつだナ。そんな暇ひまがあるなら職務執行妨害罪しやくむしつぎんぼうしというのを研究けんきゆうしておけよ」

田熊は咳せき払いと共に向うへスタスタ歩いていった。

「どうも彼奴きやつは苦くるが手だ。……そこで今のうちに……」

と署長は、周到しゅうたうに手帖を畳たたんで冥めい想そうしていると、そこへ庄内村の巡査じゆんさが入いつて来て彼の机けいの前まへで挙手きよての敬礼けいれいをした。

「報告ほうこくに参まゐりました」

「ああ、君か。いや御苦労だった。あれはどうだったネ」

その巡査は、署長の命令によって、今朝から右足湖畔うそくこはんをめぐる捜索して来た者だった。御命令によりまして、第一に空気工場へ参りました。午前八時でしたが、気球は地面に四基だけ結んでありました」

「四個？」署長は手帖を拵げて首をかしげた。

「陳述によると、懐中電灯ニヨリ三個ノ気球ヲ認メタ——とある。すると君の報告の方が一つ多いね」

署長は鉛筆を嘗め嘗め三個の横に4とかいた。

「第二の、湖尻うみじりで村尾某の乗りました舟を探しましたが見当りませんので」

「舟が見当らぬ？　そうか。湖水の中を探ってみるんだネ」

「それからトラックの跡で、墓場から青谷二郎の家までついていたという話でしたが、これはハッキリ見えませんでした。誰かが地均じならしをしたような形跡は見ました」

「フン、フン」と署長はまた手帖へ書きこんで「それからあと、どうした」

「次は新仏のことですが、あれは確かにございました。峰雪乃みねゆきのの墓です。これは初産ういざんに気の毒にも前置胎盤で亡くなりましたので……。この墓については大体おっしゃった通



りでしたが、ただ違いますとこは、新仏の上は土が被せてあるというお話でしたが間違いで、もう既に綺麗な土饅頭どまんじゅうができていました」

「ホホウ、そうか」と署長はまた鉛筆を嘗めた。「その次は……」

「もうそれきりです」

「うん、これは御苦労だった。では適宜に引取つてよろしい」

巡査は署長の方へ向いてペコンとお辞儀した後、側を向いてもう一つお辞儀をし、廻れ右をして帰つていった。

「さあ、これだけ材料が揃えば、まずわしの面目も立つというものだ」

と署長は呟いた。途端にその背後で例のエヘンという咳払いが聞えたので、署長は急に苦にむしが虫を噛みつぶしたような顔になった。

「なんじゃ、これは一体」

とベタ一面に鉛筆を走らせた藁半紙わらばんしを署長の鼻先につきつけたのは、もう夙とつくに帰つたものとはかり思つていたK新報社長の田熊だった。

「こんなまどろこしいことはやめろ。これでは殺人事件は何年たつても解けないぞ。号外だつて之これまでに六遍も出しそこなつた。犯人の血まみれ男はどうしたのだ。あいつをここ

へ引擦り出し給え。一体あの怪漢を、こんどは嚴重に困って見せぬようだが、あれは一体何者だ。とにかくこの次来たときにも、手帖と睨めくらでは、いよいよ新聞で書きたてるぞ、いいか」

田熊は云うだけのことを云うと、またスタスタと向うへ行つた。

「智恵のない奴は、哀れなものだ」そう云つてニツと意味深い笑いを浮べた署長は、また村尾某の陳述書を読みだしたが、

「そうそうこれを頼まれていた」

彼は電話機をひきよせると、番号を云つてK町の測候所を呼び出した。

「ああ、こつちはK署ですが。あのウ、右足湖を中心とする一帯の風速と風向きとを伺いたいのですが、昨夕から今朝にかけてです。……なるほど、……なるほど」としきりに感心していたが「そうですか、昨夜九時半ごろまでは西風、そこで風向きが一変して南西風に変つた。ああそうですか」

署長はまた何やら手帖の中に丹念に書こんだ。それから立ち上ると側の主任に自動車を命じた。

「わしは一寸庄内まで行って、村尾某に会つて、それから都合によつて、空気工場へ廻る

ぞ」といつて出かけた。

後で署員たちは、あの老衰署長が、こんどに限って、どうしてあのように威勢がよかったり、味な調べ方をやるのか不思議がった。

## 4

気短の田熊社長は、彼の社長室の床をドンドン踏み鳴らしていた。彼の脚のすぐそばには、なつぽふく菜葉服の工夫が三人ほど、社長の足が飛んでくるのをヒヤヒヤ気にしながら、しきりとなにか針金を床下から引張りだして接ぎ合わせていた。電話工事をやっているらしい。つた。

「オイ何時まで懸かかるのだ」

「もう直ぐです……」

丁度いい塩梅に、そのとき工事が完成した。工夫は受話器に耳を懸けて、ラジオのよう

な器械の目盛盤をいじっていたが、やがてニツコリ笑うと、受話器を外して社長へ薦めた。  
「これで聞えるのだナ。よオし、皆はやく部屋を出てゆけッ」

一同は足を宙に浮かせて、室を出ていった。

「さあ、これでアノ庄内村の調室の様相がすっかり判るんじや。犯人村尾某の供述を、警察がどんなに隠しても、わしには知れずにやいないのじや。あとできつと丘先生、さぞや腰をぬかすことじやろう」田熊社長は村尾某の監禁されている調室から秘密に電話線を引けたので、向うの話を盗聴できるというので大変機嫌がよかった。

間もなく、待ちに待った調べ室の会話が、低音ながら聞えてきた。

(どうも失礼しました)と聞きなれぬ声が出た。

(いえ、なに……)といったのは、どうやら丘署長らしい。

(……そんな訳ですから……)と始めの声が出た。

なんでも前からの話の続きらしい。(私の推理はですナ、九分どおり実証の上に立っているのですが、惜しいかな後の一分のところ解らないために、結局仮定を出でないので。その不満なままで申上げますと、さつきも説明しましたとおり、犯人はその夜強い西風が吹くということを確めた上で、かの粉碎した屍体を携えて、気球の一つに乗ったの

です。ロープを解くと気球はズンズン上昇します。風が真西から吹いていますから、ごらんなさいこの右足湖の中心線の上に気球は出ます)

田熊社長は、右足湖の位置の話がでたので周章あわてた。見廻すと、社長室の壁に、右足湖を含むこの辺一帯の購読者分布地図が貼ってあったので、彼は盗聴器一式を両手で抱えて壁際へ移動した。

(……この右足湖の縦の中心線が、正しく東西に走っていることからして、気球を湖水の真中に掲げるには、西風の吹く日を選ぶより外に仕方がなかったのです。さてそれから、程よいところで、彼の犯人は灰のようになって人体の粉末を、気球の上から湖上に向けて撒いたので。西風にしたがって、この人間灰は水面に落ちますが、今申したように気球は中心線上にいますので、灰が多少南北に拡がっても、また東に流れても、うまく湖面の中に落ち、陸地には落ちないのです。

ことごとく 悉くが水中に落ちてしまえば、いずれこれは魚腹の中に葬られることでしょう。そうすれば彼の屍体は完全に抹消されたことになります。なんと素晴らしい屍体処分法ではありませんか)

(なるほど、これア卓越した方法ですネ)

と丘署長の声が感嘆した。

（この方法で、六人の犠牲者はうまく片づけられたのです。当夜強い西風が吹いていたことは、署長のお持ちになつた測候所の風速及び風向きの報告で証明されます。七人目の犠牲者も、同様に気球に載せられ天空高く揚げられたのでした。そして同様にして粉碎屍体は気球の上から湖面へ向けて撒かれたのです。しかし前の六回るときとは違って、二つばかりの誤算が入つてきました。それは犯人のために、実に不幸な出来ごとでありました。

二つの誤算——その一つは、撒いているうちに、それまで吹いていた西風が急に向きを南西に変えたことです。それがためどんなことが起つたかと云いますと、今まで真東へ飛んでいた人間灰は改めて北東へ流され、遂にその一部は、右足湖の北岸に墜落したのです。ごらんなさい。この壇に入っている異様な赤黒い物こそ、今日私が北岸へでかけて採集してきた七人目の犠牲者の肉片にくへんです）

田熊社長は、電話で話は盗めても、その人肉じんにくの入つた壇を盗視できないことをたいへん口惜くやしがつた。

（もう一つの誤算は……）と例の声は云つたが、そのとき思いがけない「呀あッ」という叫び声が聞えた。（……こりや可笑しい。こんなところに変なものが……）とまでは聞えた

が、そのあとはガチャリという音を残して、何も聞えなくなってしまうた。

田熊社長は、惜しいところで盗聴器が聞えなくなつたので、顔を真赤にして口惜がった。すぐさま、再び工夫を呼んで直させたが、五分ばかりして彼等は、恐る恐る社長の前へ罷りでて、云つたことである。

「社長さん、もういけません。向うの方で秘密送話器を切つてしまいました。この方法じや盗み聴きはもう駄目です」

社長は万事を悟つて、苦が笑いをした。

「じゃこれから、空気工場へ出かける」

道々田熊社長は腕組をしながら、あの盗聴から得たさまざまの興味ある疑問について考えた。

「丘署長と、話をしていたのは一体誰だろう。大分腕利きらしいが、あんな男がK署に居たかしら?」

どう考えても、そんな気の利いた人物は考え出せなかつた。その疑問は預かりとしておいて外にも疑問の種があつた。

「話によると、どうやら犠牲者の屍体を粉々に砕いて、気球の上から撒くという仮定を考え

ているようじゃったが、一体そんなことは出来るのかしら？」

人間の死体をバラバラにした事件や、またコマ切れにした事件というのは聞いたことがあるがこの話のように、吹けば飛ぶ位のメリケン粉か灰のようにするといふ事件は未だ耳にしたことがなかった。どうすればそんなことが出来るのだろうか。——こいつは興味あることだったが、更に難問だった。考えてゆくうちに、

「——うん、これだナ」

と田熊社長は手を打った。あの男が、九分までは解けたが、一分だけ解けぬ問題があるといったのは、このことだと気がついた。あの男にも、どうして人間灰が出来るか、それが判っていないのだ。そう判ると、なんだかアベコベに痛快になった。

「それから、もう一つ電話を切られたところで、——二つの誤算のうち、一つは西風が途端に南西風に変ったという話だったが、もう一つの誤算は……というところで話が切れた。あれは一体どんなことを云うつもりだったろう？」

——こいつも考えたが判らない。しかしこの方は、何だかモヤモヤと明るいでも云つたように、なんだか大変判りそうであった。なんだか既に気がついていることがらの癖に、そいつが一寸胸忘れをして思い出せないという形だった。そのうちに彼の乗った自動車は



空気の工場の前に来ていた。

## 5

彼は車を降りると、門を入り、玄関からズカズカ中へ入っていった。いつも行きつけているので、玄関脇の大きな応接室へ飛び込むと、そこには一隊の警察官を率いた先客の丘署長が居て、拙い視線をパツタリ合わせた。署長は顔に青筋を立てた。

「いよオ——」と社長は一と声かけた。「いかんじやないか。折角ひとが聴いとるものを途中で切ってしまうなんて男らしくないぞ」

また先を越された署長は、ポカンと口を開いたまま、一言も云えなかつた。

そこへ工場主の赤沢金弥と、青谷技師とが入ってきた。

「やあ、これは……」

と赤沢氏は、元気のない声で署長に挨拶をした。

「署長さんが必ずここへお出でになると思っていましたよ」

と、青谷技師の方は愛想よく云った。

「今日は実は……」と署長は苦が手の方を気にしながら、来意を述べにかかった。「液体空気を一壘貫いにやってきたのです」

赤沢氏はますます泣き出しそうになりながら、幾度も肯いた。うなず赤沢氏は青谷技師に案内を命じたあとで、

「丘さん」と署長の方に向いた、「どうですか、あの事件は。どの位お判りになりましたナ」とオズオズ尋ねた。

「いや、奥さんの敵は、もうすぐ讐とつてあげますよ。犯人が屍体を湖水の中に投じたことは判明しました。この上は、犯人がどうして屍体を灰のように細かくしたかと言うことが判ればいいのです」

「ああ、そうですね、」と工場主はブルブル震え手を自分の口に当てながら、「すると犯人は誰ですか」

「それはまだ言明げんめいできません。しかしもう解っているも同然ですよ」

「オイ出鱈目もいい加減にせんか」と社長がのさばり出た。

「このボンクラ署長に何が判っているものか。誰かに散々教授をうけていたくせに。つまらんことを喋るのを止して、早く任務を果たしたがよいじゃないか」

それを見ていた青谷技師は笑いながら、署長たちを工場の方へ誘った。

工場はたいへん広く、器械は巨人の家の道具のように大きかった。強力なる圧搾器でもって空気を押し、パイプとチェンバーの間を何遍も通していると、装置の一隅から、美しい空色の液体空気が、ほの白い蒸気をあげながら滾々と、魔法壇の中へ流れ落ちていた。一方では、液体空気をボイラーに入れて、微熱を加えてゆくと、別々のパイプから、酸素ガスやネオンやアルゴンなどの高価なガスがドンドン出てきて、圧力計の針を動かしながら鉄製容器の中へ入ってゆくのが見えた。

工場はあまりに広すぎた。署長の腰骨が他人のものとしか考えられなくなった頃、液体空気貯蔵室へ来た。

「君は幽霊じゃあるまいな」と早や道をしてその室に待っていた田熊社長が署長の顔を見ると皮肉を飛ばした。

「わしはもう夙くの昔、君がこの工場の一隅で八人目の犠牲者になつたことと思つて居つたわい」

丘署長はやりかえしたいのを、青谷技師の前だというので、懸命に我慢をした。

「さあ、液体空気を頒<sup>わ</sup>けてさし上げましょう」そういつて青谷技師は、床の上から手頃の魔法壇を台の上に引張りあげた。

「それから序<sup>ついで</sup>に、御注意までに、液体空気の性質を実験してごらんに入れましょう」

青谷技師は、側の棚から、大きい二重硝子<sup>ガラス</sup>の洋盃<sup>コップ</sup>を下ろした。それは一リットルぐらい入るように思われた。次に彼は、床の上から魔法壇をとりあげて、洋盃<sup>コップ</sup>の上に口を傾けた。ドクドクと白い靄<sup>もや</sup>が湧いてくる中を例の美しい空色の液体が硝子の器の中に、なみなみと湛<sup>た</sup>えられた。

「どうです、綺麗なものでしょう。広<sup>ひろ</sup>重<sup>しげ</sup>の描いた美しい空の色と同じでしょう」

丘署長も田熊氏も感心して見惚<sup>みと</sup>れた。

「なにしろこの液体空気は氷点下百九十度という冷寒なものですから、これに漬<sup>つ</sup>けたものは何でも冷え切つて、非常に硬く、そして脆<sup>もろ</sup>くなります。ごらんなさい。これは林檎<sup>りんご</sup>です。これを入れてみましょう」

技師は赤い林檎を箸の先に突きさして、液体空気の中にズブリと漬けた。ミシミシという音がして、液体空気が奔騰<sup>ほんとう</sup>した。その後で箸を持ち上げると、真赤な林檎<sup>りんご</sup>が洋盃<sup>コップ</sup>の底

から現れたが、空中に出すと忽ち湿気を吸って、表面が真白な氷で蔽おほわれた。

「さあこの冷え切った林檎は、相当堅くなりましたよ。小さい釘ぐらいなら、この林檎を金槌かなづちの代りにして、木の中に打ちこめますよ」

技師は小さな釘をみつめて、台の上につきさすと、その頭を凍った林檎で槌がわりにコンコンと叩いた。釘は案にたがわず、打たれるたびに台の中へめりこんでいった。見物の一同は、啞然あぜんとした。

「さあそこで、こんな堅い林檎ですが、これが如何に脆もろいかお目にかけてみましょう。ここにハンマーがあります。これで強く殴なぐってみましょう」

そういつて技師はハンマーをとると、台上の冷凍林檎を睨にらんだ。

「エエイツ」

ポカーンと音がして、ハンマーは見事に林檎を打ち砕いた。あーら不思議、林檎はグチヤリとなるかと思いの外、一陣の赤白い霧となつて四方に飛び散り跡片もなくなった！

「林檎が消え失せた！」

と署長が叫んだ。

「イヤ今に見えてきます。ほら、この台の上をござらんさい。赤い灰のようなものが、だんだん溜たまってくるでしょう。飛び散ったのが、下りてくるのです。——これが粉碎された。林檎の一部です。……」

丘署長はこのとき棒のように突つ立った。

「ああ判ったぞ。ああ、判ったぞ」

彼は胸を叩たたいて喚わめいた。

「ああ、人間灰事件にんげんかいじけんの謎が遂に解けたぞ、七人の犠牲者は、いずれも液体空気の中に漬けられたのだ。そして氷点下百九十度に冷凍され後、金槌かなんかで打ち砕かれ、あの人間灰に変形されたのだ。よおし判った。犯人は確かに、この空気工場の中にいる！」

そう署長が叫んだとき、卓上の電話がチリンチリンと鳴った。青谷技師がそれを取上げようとするのを、昂奮こうふんしきつた署長は横から行って、ひったくるように取上げた。

「モシモシ。誰か来て下さい」

と、上ずった悲鳴が聞えた。

「君は誰だ。名乗り給え」

「ああ、近づいて来る。妻の幽霊だ。助けて呉れくッ。ああ、殺されるーッ」

異様な叫びと共に、電話は切れた、署長の顔は、赤くなったり蒼あおくなったりした。電話の主は工場主の声に違いなかった。

「赤沢氏が幽霊に襲われ、救いを求めている。赤沢氏の室へ案内し給え、早く早く」

「えッ、先生がッ。——」

青谷技師を先せん登とうに、署長以下がこれに続いて、室外に飛び出した。階段をいくつか昇って、とうとう特別研究室に駆けつけた。

扉を開いてみると、居ると思つた筈の、赤沢博士の姿はどこにも見えなかった。しかし受話器の外はずれた電話機が、床の上に転がっていた。してみると只今の恐怖の電話は、この室から掛けたものに相違ない。博士と幽霊とは一体どこに消えたのだろうか。

一同は顔を見合わせて、沈黙した。

「オイしつかりしろ署長」と田熊社長が叫んだ。「なんか変な音がするじゃないか」

「変な音？」

なるほどどこやらから、ピシピシプツツと、異様な音響が聴えてくるのであった。

「うん、見付けたぞ」

青谷技師が室の一隅へ飛びこんで行った。そこには青いカーテンが掛けてあった。技師はカーテンをサツと引いた。すると衣装室と見えたカーテンの蔭には、洋服は一着もなかった代りに、白いタンクが現れた。そこにある一つのハンドルに飛びついて、それをグングン右へ廻した。

「それは何だ」と署長が叫んだ。

「これは液体空気のタンクです」と技師は云つて、一同の方へ険しい眼を向けた。「あなたがた注意をして下さい。その大きな机の後方へ出てくると、生命がありませんよ」

「ナニ、生命がないとは……」

恐いもの見たさに、一同は首を伸べて、大机の後方を覗きこんだ。

「いま明けてみますから……」

青谷技師は側らの鉄棒をとつて、床の一部を圧した。すると板がクルリと開いて、床の下が見えてきた。床下には普通の洋風浴槽の二倍くらい大きい水槽が現れた。その中を見



た一同は、思わず呀あツといって顔を背そむけた。その水槽からは湯気のようなものが濛もう々もうと立ちのぼり、その下には青い液体が湛たえられ、その中に一個の人体が沈たんでいるのが認められた。引き上げてみると、それは外ならぬ赤沢博士の屍しかばね体たいだった。全身は真白に氷結し、まるで石膏像せっこうぞうのようであったが、その顔には恐怖の色がアリアリと見えていた。——青谷技師は、このハンドルを廻まわさなければ液体空気はなおドンドンこの水槽の中へ入いって行く筈はずだと説明した。

「これは面白いことになってきた」K新報社長は喚わめきたてた。「これはテツキリ赤沢金弥が犯人じゃろうと思おもっていたが、赤沢は幽霊に殺ころされてしまったじゃないか。オイ丘署長、犯人は一体誰に決めるのだ」

丘署長は、この激きつしい詰問きつもんに遭あつて、顔を赤くしたり蒼あざくしたり、著いちじしい苦悶くもんの状じやうを示した。しかし遂ついに決心の腹を極きめたらしく、大きな身体をクルリと廻まわわすやいなや、青谷技師に躍はりかかった。

「さあもう欺あざされんぞ。君を殺人犯の容疑者として逮捕する！」

「これは怪あやしからん」

青谷技師は激しく抵抗したが、署長の忠実なる部下の腕力のために蹂躪じゅうりんされてしま

つた。彼の両手には鉄の手錠がピチリという音と共に嵌<sup>はま</sup>ってしまった。しかし署長以外の者は、意外という外に何のことやら判りかねた。

「おうおう、派手なことをやったな。但し君はまさか気が変になったんじゃないとK新報社長がやつと一と声あげた。」

丘署長はそれに構わず、技師を引立てた。

「署長さん——」と青谷は怨<sup>うら</sup>めしそうに叫んだ。「これは何が何でもひどいじゃないですか。どうして手錠を嵌<sup>は</sup>められるのです。その理由を云って下さい」「理由?——それは調室へ行つてから、こっちで言わせてやるよ」

## 7

青谷技師は調室の真中に引きだされ、署長以下の険<sup>けわ</sup>しい視線と罵<sup>ばげん</sup>言とに責められていた。彼は極力犯行を否定した。

「……判らなきや、こつちで言つてやる」と署長は卓を叩いた。「これは簡単な問題じゃないか。あの特別研究室に入るのは、博士と君だけだ。床をドンデン返しにして置いて、その下へ西洋浴槽のようなものを据<sup>す</sup>えてサ、それから一方では液体空気のタンクを取付け、栓のひねり具合で浴槽の中へそいつが流れこむという冷凍人間製造器械は、君が作ったものに違いない。博士自身が作ったものなら、遺書も書かずに死ぬというのは可笑<sup>おか</sup>しい。幽霊に追われたとしても、自分の作ったものなら、そこへ逃げ込むのも可笑しいし、第一ドンデン返しにならないように鍵でも懸けて置きそうなものじゃないか。だから君だけ知つていて、博士を脅<sup>おび</sup>かして墜落させたものに違いない」

「署長さん、それは貴下の臆<sup>おく</sup>測<sup>そく</sup>ですよ」と青谷はアツサリ突き離れた。「ちつとも証拠がないじゃありませんか。それに当時私は貴下の側にいました。それでいて、墜落させたり、幽霊を出したり、そんな器用なことができますものか」

「ウン、まだそんなことを云うか。……夫人殺害のことでも、君のやったことはよく判つているぞ。君はあの夜八時に帰つたということだが、それは確かとしても、工場の門は一度六時に出ているじゃないか。わしが知るまいと思つてもこれは門衛が証明している。そうしたと思つたら、忘れ物をしたというので、七時半ごろ再びトラックに乗って引返して

きた。そしてまた八時ごろになって、本当に帰ってしまった。君が引返してきたときには、工場の中には自室で読書に夢中の博士と、別館には婦人が居ることだけで外に誰も居ないと知っていたのだ。そして約三十分の間に、実に器用な夫人殺害と、屍体の空中散華<sup>さんげ</sup>をやつて、八時頃なに食わぬ顔で帰つたのだ。どうだ恐れ入つたか！

「それはこじつけです。私はそんなことをしません」

「夫人を殺害しないと云つても、それを証明することができんじゃないか。君に味方するものはおらん」

「そんなに云うなら、私は云いたいことがあります。これは貴下の恥になると思つて云わなかつたことです……」

「ナニ恥とは何だ」署長は眼の色を変えた。

「恥に違いありませんよ。貴下方はあの晩湖水の上空から撒かれた人間灰が、珠江夫人の  
だと思ひこんでいるようですが、それは大間違いですよ。湖畔で採取した人肉の血型<sup>けっけい</sup>検査によるとO型だったというじやありませんか。しかし夫人の血型はA B型です。これは先年夫人が大病のとき、輸血の必要があつて医者<sup>いしや</sup>が調べて行つた結果です。O型とA B型——一人の人間が同時に二つの血型を持つことは絶対に出来ません。人肉の主と夫人とは

全く別人です。貴下はこんな杜撰な搜索をしていながら、なぜ僕を夫人殺しなどとハツキリ呼ぶのですか」

「ウム。——」

署長はその瞬間フラフラと、脳貧血に陥りそうになった。実は血型なんてハイカラなものも考えたことがなかった。今となつてこんな痛いところを突かれるなんてあるだろうか。彼の威信はこの瞬間地に墜ちた。

「どうです署長さん」なおも青谷は苛責の手を緩めなかった。「僕はそのことだけでも無罪の筈です。僕を苦しめてどうなるのです。それより、なぜあの血まみれの容疑者を責めないのです。あんな怪しい奴をなぜ……」

そのとき、背面の扉がバタンと明いた。そして青谷の知らない男の声が出た。

「怪しいとは僕のことですか」

又ツクリと青谷の前に立ったのは、長身の髭だらけの工夫体の男だった。作業服はヨレヨレながら、その声は気味の悪いほどしつかりしていた。

「僕こそ無罪ですよ。署長さんの云つたように貴下には手錠が懸るのが本当です。しかしすこし事実の違っている点がありましたから、訂正して置きましょう。この話の方が青谷

君の腑ふに落ちるでしようから」

「君は誰です？」

「私ですか。人間灰が湖上へ降り注いでいる真下を舟で渡った男です。やがて帽子から顔から肩先から、融とけた血で血達磨ちだるまのようになった男です。なるほどこの肉も血も、珠江夫人ではなかった。貴下の言うとおりにネ。血けつ型けい〇型の人肉は誰だったのでしょうか。それは貴下の家から程近い墓場の下に睡くっていた女のものでした。峰雪乃みねゆきの——ご存知ですか、この名前を。たった今、その土饅頭を崩くずして棺桶の中を開いて来ましたが、中は全く空っぽです。貴下はあの晩、一度工場の門を出て墓場へゆき、闇やみに紛まぎれてこの仏ほとけを掘りだし、工場へ引返したのです。そして人肉散華じんにくさんげをやりました。墓の方は時間が無かったために、壊した土饅頭を作り直す暇がなく、上に土だけ被かぶせておいたところを、はからずも通りかかった一人の男が見ました。つまりこの僕がネ」

髭男はニヤリと笑った。

「全くお気の毒でしたネ。人肉散華から再び帰って、貴下は土饅頭を作り、トラックの跡を消したが、それはもう遅すぎました。なぜこんなことをやったか。貴下はその夜かねての手筈で夫人に姿を隠させて、丁度夫人ちやうどが失踪したようにみせたのです。そして万事は

赤沢博士に嫌疑がかかり、そしていい加減なところで博士が自滅するように計画をたてたのです。ところが署長のために不意に手錠をかけられてしまったので、狼狽ろうばいのあまり、血型のことなど持ち出して、即座に手錠を解かせるつもりでした。永く手錠をかけられていることは貴下の大不利ですからネ」といって髭男はジロリと青谷の顔を見た。

「なぜ大不利か？ 手錠をかけられていることが永いほど、純潔らしい貴下の顔形が曇ってゆくからです。これまで六回に亘って貴下が犯してきた変態殺人がそのまま露見せず終るとは貴下も考えないでしょう。貴下は全く許すべからざる趣味の人です。貴下は神を忘れている。科学者が神を忘れたときは、いつまでも貴下のようになりやすいものです。こうしているうちにも、湖底に潜くぐった潜水夫が、六人の犠牲者の遺物を捜しあてて持つてくるかも知れません。……手錠を早く外はずして貰いたいたために、貴下は反証なんかを挙げて署長を駭おどろかせたが、貴下は自らの罠にかかったのです。珠江夫人は本館内の貴下の室に隠れていました。夫人は一旦貴下の誘惑にかかりはしたものの前非を悔いて、実は博士の室へ打ち明けに出たところを、博士は幽霊だと駭いたのです。そしてとうとう貴下の仕かけで置いた罠に陥ってあの最期です。僕もあのときは、もっと上等の扮装なりをして一行に加わっていたので、『幽霊』という言葉とかねて血型の相違についての疑問とによって、夫人

の生存していることを悟りました。そして一足お先に夫人と共にこっちへ帰っていたので  
す。逢いたければ夫人をここへ連れてきましようか」

一座の駭きの中に、青谷は眼を閉じた。しかし暫くするとまた頭を上げて云った。

「すると貴下は一体誰ですか」

「僕ですか」と髭男が云った。「僕はこの右足湖畔の怪を調べるために、東京から派遣さ  
れたこういう者です。犯人を捜す便宜べんぎのため、署長さんに永く隠して貰っていたのです」

そういつて、青谷技師の手錠の上へ一枚の名刺を置いた。それには「私立探偵帆村ほむらつそうろ荘  
六」とあった。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第3巻 深夜の市長」三一書房

1988（昭和63）年6月30日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1934（昭和9）年12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：たまごん。

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人間灰

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>